

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGAGolf Journal



◆特集1◆ 2008年ゴルフルール改訂を前に

◆特集2◆ チーム・ジャパン・ジュニア 発足について

From JGA

チーム・ジャパン・ジュニア発足の背景

ナショナルチーム紹介

2007年男女JGAナショナルチームが決定!

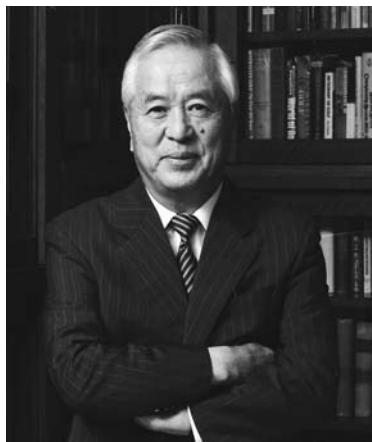


財団法人 日本ゴルフ協会

“高反発ヘッド”が規制を受ける理由

「飛距離の増加だけでなく、ゴルフの本質を変える恐れがある」

ここ数年、ゴルフ界で大きな話題となってきたドライバーの飛距離規制。すでにプロツアー競技やJGAの主催する選手権競技を中心に、競技の条件でスプリング効果規則（SLE規制）に適合したクラブの使用が義務付けられています。2008年からは一般ゴルファーにも、この規則の遵守が求められます。新規規則施行を前に、今一度、JGAとしての見解を示しておきます。



(財)日本ゴルフ協会 常務理事
規則委員会 用具審査部会 部会長 大橋一元

写真提供:北川外志廣/We're Golfers

来年2008年1月1日より、R&A/USGAのテスト基準値を超えるスプリング効果を有するクラブがゴルフ規則に不適合のクラブとなることは皆様すでにご承知のことと存じます。規則の施行まであと半年余りとなりましたが、ここでもう一度このスプリング効果規則についておさらいしたいと思います。

まず、一般に「高反発クラブ」と言われているクラブとはどんなクラブなのでしょう？用具の規則が初めて明文化されたのは今からおよそ100年前に遡ります。1908年R&A規則の終わりの部分の記述に、「クラブは単純なシャフトとスプリングのような機械的装置を一切有していないヘッドからなる」というクラブの形状と構造についての初めての規定が導入されました。

この規則に導入された「機械的装置 (mechanical contrivance) の制限」によって、スプリングのように機能することを意図された特徴を含むデザイン (例:ばね仕掛けのヘッド) は不適合とされてきましたが、そうした構造をもたないものであってもすべてのゴルフクラブはインパクトの間にある程度の柔軟性を示すことが知られていました。

スプリング効果という用語は1984年から規則で使用されていますが、この効果はチタンなどの素材から製造される近年のドライビングクラブにおいてより大きくなるということが次第に知られるようになりました。これを受けて、USGAは2002年8月に附属規則II、5aの「テスト内規」とされているテスト方法としてドライビングクラブのスプリング効果を定量化して制限するためのキャノンテストを導入し、「クラブヘッドは0.822+許容誤差0.008を越える反発係数 (COR) を持ってはならない」と規定しました。

このテストは2004年1月からペンデュラムテストに変更され、「クラブヘッドは239 μ s+許容誤差18 μ sを越える特性時間 (CT) を持ってはならない」と規定されました。ペンデュラムテストはヘッドの柔軟性を測定する機器であり、大掛かりな装置が必要となるキャノンテストに代わる簡易的な測定装置としてR&A/USGAによって開発され、スプリング効果を測定する公器として導入されました。ペンデュラムテストの結果はキャノンテストの結果と高い相関を示しています。こうした反発係数 (COR) や特性時間 (CT) のテスト基準値を超えるクラブが一般に「高反発クラブ」と呼ばれているのです。

それではなぜこのスプリング効果の規制が行われるのでしょうか？一般にはゴルファーの飛距離が伸びすぎていることを抑制するためにこの規則が制定されたと考えられています。確かに近年のゴルファーの飛距離の増加は顕著であり、スプリング効果も飛距離の一因であることに違いありません。しかしながら、規制の理由は単に飛距離の抑制だけではないのです。

歴史を振り返ってみると、ゴルフ用具メーカーはゴルファーにより良い道具を提供しようとこれまでの多くの技術革新を行ってきました。そうした用具の進化はゴルフの発展に大きく貢献してきたという一方で、クラブ作りの新しい技術は時として規則統括団体の規制と対峙してきました。

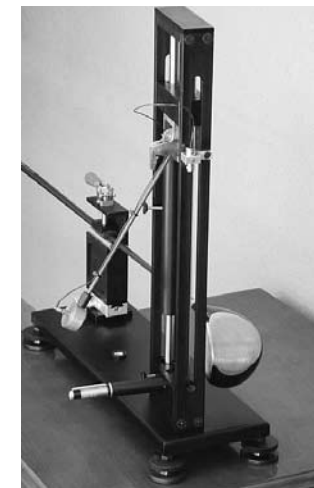
R&AとUSGAは2002年に発表した「原則の共同声明」の中で、「規則の目的はゴルフの良き伝統を守り、プレーヤーの技量よりも用具の技術的進歩に過度に頼りすぎることの抑制し、プレーヤーの技量がゲームを通しての主要な成功の要素であることを確保することである」と述べています。R&AとUSGAは世界的なゴルフの統括団体としてどのような用具を使用することがゴルフゲームにとって望ましいのかを判断し、規則を制定しているのです。判断基準の揺るぎない原則はいつも「それはゲームにとって良いことなのかどうか？」ということです。



キャノンテスト
ゴルフボールを一定の速度で打ち出してクラブヘッドに衝突させ、衝突の前後のボールの速度を測定する
反発係数: COR (Coefficient of Restitution)
写真提供: MPS Asia Co., LTD.

ゴルフは「参加 (Participation)」、「楽しみ (Enjoyment)」、「チャレンジ (Challenge)」の3要素のバランスが重要です。老若男女問わず多くの人がプレーでき、ゲームを楽しめるようにすること。そしてそこにはプレー上の困難を克服するという「挑戦」がなければなりません。ある用具を使用すれば誰もが300ヤードを飛ばし、ウエッジで容易にグリーンを捉えられるようになれば「チャレンジ」の要素がなくなってしまい、ゴルフの魅力が失われてしまいます。もちろん現状で誰もが300ヤードを飛ばせるクラブは存在しませんが、近年の用具の技術進化による恩恵が大きくなり、ゴルフが簡単になっていくことを懸念しているのです。ゴルフゲームの本質を変えてしまう恐れがあるほどに近年の用具の性能が向上してきたと考えたR&AとUSGAは、そうしたゴルフ用具がもたらすゲームへの影響を実験室での科学的な検証だけではなく、プロツアーから一般のアマチュアゴルフまでゲームがどのようにプレーされているのかについて様々な観点から幅広い調査・研究を行ってきました。

その結果、近年の用具規則の変更として、2004年からはクラブヘッドの大きさ、クラブの長さが規定され、2006年5月からはクラブヘッドの慣性モーメントの制限が施行されています。こうした一連の規制の導入のひとつとして、2008年からスプリング効果新規規則が施行され、一般に「高反発クラブ」といわれているクラブは使用できなくなるのです。



ペンデュラムテスト
振り子の先に付けた鉄球をクラブフェースに衝突させ、鉄球とクラブフェースの接触している時間 (CT) を測定する
特性時間: CT (Characteristic Time) μ s : マイクロセカンド (100万分の1秒)
写真提供: R&A Rues Limited

“高反発ヘッド”が規制を受ける理由

このスプリング効果規則について、「プロとアマで規則を分ければよい」というご意見があることも承知しております。しかしながら、そうした規則2分化論に対して、R&AとUSGAは2002年に発表した「原則の共同声明」の中で、「R&AとUSGAは、技量に関わらず、ゲームをするすべてのプレーヤーのために1つの規則を保持することがゴルフの最大の強みであると考え続ける」と述べています。JGAは日本のゴルフの統括団体としてこの世界統一のゴルフ規則を日本のすべてのゴルファーに普及させるという使命があり、また、そうすることがゴルフの最大の利益となると信じています。

スプリング効果新規則については加盟クラブを中心にこれまでもリリース、ポスター等で告知をしまいましたが、未だに一部では「規制は競技にだけ適用されるものであり、遊びのプレーであれば高反発クラブを使ってもよい」とか「倶楽部ごとの判断でローカルルールを制定すれば高反発クラブが引き続き使用することができる」といった誤った解釈をお持ちの方がいることも認識しております。そうした考えはUSGAとR&Aとの間の規則の施行時期の不一致(USGA1998年、R&A2008年)や現行規則下のドライビングクラブの競技の条件での規制(2007年12月31日まで)というやや複雑な状況から生じた誤解であり、2008年1月1日からはゴルフ規則が変更され、現行の規則では適合であるテスト基準値を超えるクラブが新しい規則の下では不適合となることをよく考えれば、敢えて規則に違反する用具を使用しようとするゴルファーはいないはずであり、ほとんどのゴルファーは規則に適合した用具でゴルフをプレーすることを望むと考えます。

最後にもう一度繰り返しますが、今回の2008年スプリング効果新規則はゴルフ規則本則の変更であり、それをローカルルールで修正することは認められません。また、競技に参加しない場合であってもゴルフゲームをするのであれば規則に従ってプレーすることは当然のことです。仲間との遊びのプレーであっても規則を知らずにバンカー内でクラブをソールするプレーヤーはいないと思います。用具の規則もゴルフ規則の一部であり、規則を守ってプレーすることでこそゴルフの持つ魅力を最大限に感受することができるのです。



慣性モーメントテスト
クラブヘッドの重心を通る垂直軸のまわりのヘッドの慣性モーメントを測定する
※慣性モーメント(Moment of Inertia):回転運動に対する抵抗の大きさを表す
写真提供:R&A Rues Limited

1998年にUSGAが規制を発表したとき、R&Aはスプリング効果規則を採用しないことを当初表明しました。しかしながら、R&Aはゴルフに2つの規則が存在することになることを懸念し、日本を含むR&A管轄下では規則の適用を2008年からとして、それまでの間は委員会がスプリング効果を規制する「競技の条件」を採用できるとしました。JGAではこのドライビングの競技の条件を2003年の日本オープンから採用しており、2006年からはすべての主催競技で採用しています。現在は競技の条件で規制されていない高反発クラブであってもゴルフ規則上は適合クラブですが、来年2008年からは規則に不適合のクラブとなりゴルフゲームで使用できなくなります。



写真提供:北川外志廣/We're Golfers

スプリング効果規制の経緯

1998年

■ USGAがCORの規制を発表;USGAは規則として適用

2002年

■ R&A/USGAが原則の共同声明を発表

要旨:用具規則の目的はゴルフの持つ良い伝統(golf's best tradition)を保護し、ゴルファーの技量よりもテクノロジーに過度に頼ることを抑制し、ゴルファーの技量がゲームにおける成功の主要な要素であることを確保することである。

R&AはCORを規制する「競技の条件」を採用することに決定し、2008年からはスプリング効果(SLE)を規制する新規則を制定することを発表

2004年

■ R&A/USGAでペンデュラムテスト(振り子式簡易測定器)の導入

テスト上限値がキャノンテストによる反発係数(COR)0.830からペンデュラムテストによる特性時間(CT)257 μ sへ変更

2005年

■ R&Aの全てのチャンピオンシップで「ドライビングクラブの競技の条件」を採用

■ 適合ドライバーヘッドリストの発行

2006年

■ JGAの全ての主催競技で「ドライビングクラブの競技の条件」を採用

■ すべてのロフトのすべてのクラブ(パターを除く)のスプリング効果の測定

2008年

■ スプリング効果新規則の施行(R&A)

■ テスト基準値を超えるクラブはゴルフ規則に不適合のクラブとなる

適合ドライバーヘッドリストはJGAホームページ(www.jga.or.jp)をご参照ください。

スプリング効果: SLE (Spring-Like Effect)
反発係数: COR (Coefficient of Restitution)
特性時間: CT (Characteristic Time)

※JGA(日本)はR&A管轄下に含まれます。

ゴルフールの精神とは

～ゴルフ それは、真に「内なる自己」と触れ合うことのできる行為であり、同時にそのことは他への忠実なる自己表現の姿である～

4年に1度のルール改正(注1)を前に、高反発クラブの規制(SLE(注2)ルール適合クラブの義務付け)が一般ゴルファーの間でも話題になっている。

その詳細は、冒頭で大橋一元用具審査部会長に寄稿してもらった通りだが、ここで今一度、「そもそもゴルフにおけるルールとは」ということについて考えたい。ゴルフの精神が宿るゴルフールについて、JGA規則委員長村津敬介氏に伺った。



(財)日本ゴルフ協会 理事
規則委員会 委員長 村津敬介

—— ドライビング飛距離の規制が話題になる中、一般ゴルファーの間でも「ゴルフール」に対しての関心が高まっているように感じます。

村津 SLEルールについては、2002年に発表されたR&A(注3)/USGA(注4)の共同声明にもあるように、6年間の猶予期間を経ての実施となります。この6年間に市場の高反発クラブが一掃され、プロアマを問わず、08年には規則に合致したクラブを使用している状況を目指していたわけです。

—— しかし現実には、02年の後も高反発クラブの開発・販売は続きました。

村津 もちろん、中にはいち早く規則に適合したクラブの開発に着手したメーカーもありましたが、なかなか徹底されなかったことは事実だと思います。

—— 事前に新たなルール施行が通達されながら、そのぎりぎりまで旧来のルールを利用した格好ですね。

村津 これは解釈の問題だと思いますが、たとえば欧米などでは、02年以降、当然のようにルール適合クラブの開発が進められたわけです。一般的にスポーツはルール無くしては成立しませんよね。日本のゴルファー、各メーカーには今一度、ゴルフールについて考えていただきたいですね。

—— 競技は厳格なルールの下に行われて当然。でも競技に参加しない者はそれほど厳しくなくても

いいのでは?という風潮があるようですね。

村津 そもそもゴルフを競技と遊びに分離して考えることがおかしいと思います。それはゴルフに限らず他のスポーツも同様です。ラグビーのスローフォワード(ボールを前に投げる)やサッカーのオフサイド(攻撃陣の先回り)など、このルールが変わってしまうと、競技は決定的に変質してしまう。すると、まったく別の競技となるか、もしくは衰退し、誰もプレーしなくなるかも知れません。それを防ぐために厳然としたルールが設けられている。そして実際の競技の場では、審判がルールの監視をする。ゴルフだって同じことです。ただ他のスポーツと決定的に違うところは、プレーヤー自身が審判であるということです。

—— 他のスポーツが、ルール違反ぎりぎりの攻防を繰り広げたり、あわよくば審判の目を盗んで自分に有利な動きをすることも技術の内と言われますが、ゴルフの場合、自分自身が審判だからこそ、絶対にルール遵守の精神が養われる。ゴルフが自己規律のスポーツと呼ばれるゆえんですね。

村津 そうですね。確かに「ゴルフのルールは煩雑で…」と言われることもあります。でも整地された決められたフィールドで行われる競技ではなく、広大なゴルフコースが舞台となり、さまざまな状況の下で行われる競技だからこそ、ルールに精通することは、

プレーヤーとしてばかりでなく、審判としての価値も向上していくのです。余り知られていませんが、タイガー・ウッズは最もルールに精通したプレーヤーと言われています。

—— グッドプレーヤーではなく、「グッドゴルファーになる」ということですね。ただ現実をみると、高反発ヘッド使用の問題に象徴されるとおり、「遊びでなら、(ルールを犯して高反発ヘッドの使用も)いいんじゃないか?」と、勝手に拡大解釈するゴルファーが少なくないように感じます。村津 たとえば打球地点に行ってみたら自打球がOBに出ていた。ティーインググラウンドまで戻るのが面倒だからと「その近くにドロップして“前4(前進4打の意)”でプレーしていけば?」「ま、遊びだからな」とプレーしたら、その瞬間からゴルフではなく、ゴルフみたいなゲームをプレーすることになり、当然そのようなスコアはゴルフのスコアとして認められません。ルール違反したほうがラクかも知れませんが、長いスパンでみたら、そのゴルファーは、ゴルフという競技のもつ楽しみを自ら放棄している事になります。また、ゴルフを始めたばかりの人がそれを見たら、そのようにプレーするのが当たり前だと思ってしまうおそれもあり大変心配です。

—— 現在では、ゴルフ発祥国のイギリス(R&A)とゴルフ大国アメリカ(USGA)が“統一ルール”という形で規則が統合されています。

村津 そのおかげで、どこでも誰とでも堂々とラウンド出来るのです。ゴルフの世界的な発展を思うとき、この統一ルールの存在は実に大きな役割を果たしていると思います。

—— 地域の違い、言葉の違いを乗り越えて、ゴルフという共通の楽しみを共有できますね。



村津 他国の方とラウンドを共にするときには、ルール・エチケットに精通しているだけでゴルファーとしての扱いを受けます。勿論、技量がよければなおさらですが。ところが、たとえばベストシーズンにもかかわらず、一人でウィンタールール(6インチリブレスなど)を採用していたらどう思われるでしょう。—— フェアウェーにあるボールを平気でコロリと動かす方、時々見受けられますね。半ば習慣化している人もいますよ。

村津 そうした習慣は通用しないのです。自己判断による“前4”しかり、高反発ヘッドの使用しかり。「使ってはいけない」というルールなのですから、「試合じゃないから」「遊びだから」という発想はあり得ません。どんなに素晴らしいショットが放てる人でも、ルール違反を繰り返す方は「二度とご免」と敬遠されてしまいますよ。

—— しかし考えてみると、判定を審判など、他者に委ねられないスポーツというのは、本当にルールに精通し、己を律していかないと楽しめないスポーツといえますね。

村津 「ルールに精通」「己を律する」というと大変そうに感じますが、要は普通にやればいいのです。普通とは、インプレーのボールには触れないとか、自分に有利な解釈をしないとか。そうした基本的なことから始めればいい。ルールの起源を思っても、それは遊びの中の共通認識に始まっているのです。ボールを手で投げると棒で打つ人が混在していたら同じ遊びではなくなくなってしまいませんか?ルールとは、みんなでひとつの遊びを行うために自然発生したものなのです。

—— そこには競技とか遊びとかの区別はありませんね。村津 長らく1対1のマッチを念頭に置いたルールでした。ところがゴルフが大西洋を渡ってアメリカへ広がった後、より多くのゴルファーといっせいに遊び、競うために、ストロークプレーという方法が一般的になり、考案されてだんだんと現在のルールが形作られていったのです。

(注1) 4年に1度、R&AとUSGAが合同でルールの見直しを行う。次回の変更は2008年1月1日に施行する。

(注2) Spring-Like Effect (スプリング効果)の略。ゴルフ付属規則II, 5a参照。

(注3) Royal and Ancient Golf Club of St. Andrewsの略。ゴルフ規則についての統轄責任と権限はR&A Rules Limitedに移譲されている。

(注4) United States Golf Associationの略。全米ゴルフ協会のこと。



—— そのあたりから、競技と遊びを区別して考えるようになってしまったのでしょうか。

村津 これは私見ですが、どうも欧米のゴルファーと比べ、日本の一部のゴルファーの認識が違うように感じます。欧米では「遊びだから…」という発想はありませんから。たとえ競技に参加しているわけでもなく、ルールはルール。遊びであり、レジャーであるからこそ、ルールに則ることで、ゴルフという遊びが楽しめるのです。ちなみに“アマチュア”という言葉は、ラテン語の“愛する”という言葉から派生しているそうです。ゴルフをこよなく愛する方々だからこそ、全世界のゴルファーが同じ条件の下でゴルフを楽しんでいただきたいですね。

—— ルールの大切さは理解できました。しかし、高反発ヘッド規制について、根本的な部分で「なぜダメなのか？」と疑問に感じている方も少なくありません。

村津 用品用具に関しても、ゴルフ本来の楽しみを守るため昔からその時代ごとにルールが定められてきました。それは飛距離だけの問題ではなく、方向性においても。誰が打ってもまっすぐに良く飛んでしまう道具では、ショットに技量の差が生じにくくなる。現状のゴルフコースもこれ以上改修するのが難しいところまで来てしまった。大橋部会長も言っておられる様にこのまま放置しておけばゴルフの魅力が失われ、ゲームの本質を変えてしまうことになりかねません。だから規制するのです。

—— ある意味、用品開発とルール規制はたちごっこのような感じもしますね。

村津 一般的にゴルファーは「より飛んで、より方向性の良いクラブ」を望み、その期待にメーカーが応えて来た歴史があります。そしてルールには、行過ぎた開発にブレーキをかける役割もある。もちろん長い時間を掛けて検討した結果の新ルールです。これはひとえに「ゴルフを守る」ための処置なのです。

—— クラブ性能で飛距離を維持したいというベテランゴルファーの声もあるようですが。

村津 シニア用とか、あるいは競技用とレジャー用にルールをそれぞれ定める…。そうした方法では、結果的にルールが幾通りも存在してしまう。するとその時点で、もうゴルフとは呼べなくなる。ゴルフがひとつの競技である限り、単一ルールでプレーされるべきでしょう。それだからこそ、子供も大人も男性も

女性も一緒になって同じフィールドで楽しむことができるのではないのでしょうか。

—— 池ポチャの後の処理とか、OBの罰打とか、「ゴルフはペナルティばかりで損した気分」という方もおられるようですが。

村津 池ポチャにしてもOBにしても、それ自体、別段ルール違反ではありません。ただその後の処理を間違えては、もう一緒にゴルフを楽しむことができ



なくなる。基本は一つのボールでホールアウトですが、ボールを紛失すれば、それが不可能になります。それではかわいそうと、ストロークを付加してプレーに復帰できるように、ルールで規定しているのです。

—— ボールを紛失する、誤ってボールに触れてしまった、動かしてしまった。ルールがなければ、そこでゲーム終了のところ、ルールで救済されているわけですね。

村津 ですからゴルフのペナルティーは他のプレーヤーと共にゲームを続ける為の処置と考えて下さい。例えば、止まっているボールを動かしてしまった場合、1打の罰を課して球を元の位置に戻すという処置をとることによって他のプレーヤーと再び競うことができます。元の位置に戻さないでプレーした場合、1打の罰では他のプレーヤーとバランスがとれないので2打の罰を課すということになります。また、元の位置に戻さないことによってプレーヤーが非常に大きな利益を得た場合にはもはや打数を課すことではバランスがとれないのでその時はゲームから外れてもらうということで競技失格の罰が課せられる場合もあるのです。

—— OBの場合は、1打目をOB域に打ち込んだ。再びゲームに参加するために「1打目加」して、改めて3打目を打ち直す。

村津 そういう手順を排し、フェアウェーの適当な地点から「4打目としてプレー」というルールは、本来

あり得ない話なのです。

—— 隣のホールに打ち込んだら、1打目加してフェアウェーに戻すという「1ペナルルール」も、気になりますね。村津 “前4”にしる1ペナルルールにしる、結局ゴルフコースのスムーズな運営を促すためのものであって、ゴルフ本位のルールではありません。ゴルフに良く似た違うゲームを楽しんでいるようなものです。

—— 現実にそうしたルールを採用しているコースは多く、しかもゴルファーもその決まりにまったく疑問を持たないようです。

村津 ゴルフコースの設計者も、ゴルフルールに精通しておく必要がありますね。近年ゴルフがとても盛んになってきた中国では、R&Aから国際的なレフリー養成の指導を受けることになりました。鉄は熱いうちに打てとばかり、初期の段階で徹底的に正しいルールを常識化させようということです。

またヨーロッパでは、ルールの審査や試験を経て、ゴルファーにラウンドを許可する制度を確立している国もあります。

—— 将来的には日本でも、もっと当たり前のように正しいルールが普及しなくてははいけませんね。

村津 JGAとしてもさまざまな方法で正しいルールの普及に努めています。やはりそれぞれのクラブ、コース、そして地域のリーダーとなるゴルファーの積極的な参加が不可欠でしょうね。また一部のクラブでは、クラブ競技をもっと公式な競技としたいという動きもあります。そうした機運を察知して、ルールに対する意識の高まりを促せていければと



思います。

—— ゴルフはあくまで自己責任、自己完結のゲームですからね、最後はいつもラウンドしているコースや仲間の間でしっかりとルール管理ができるようになってははいけませんね。

村津 「管理しろ」とか「守らせる」のではなく、「ルールを知ったら、無用な罰を受けることもなくなるし、楽しみも増してくる」ことを知って頂きたいです。そのために、今はまだ準備段階ですが、ルールに関する資格制度を設けてはどうかというプランもあります。まずはJGA内部から始まり、各地域単位、県単位、各クラブ単位、そして一般ゴルファーへと普及させていければと思います。

—— ルールはゴルファーを縛るものではなく、ゴルフを守り、ゴルファーに深い楽しみを提供してくれるものだという意識が、広くいきわたることを願います。今日はどうもありがとうございました。



ゴルフ強豪国復権プロジェクト!

～ツアー最年少優勝の石川遼も初代メンバーの「チーム・ジャパン・ジュニア」とは～

JGAでは、ナショナルチームによる国際試合での成績向上を目標に、今年から「チーム・ジャパン・ジュニア」(以降チームジュニア)を発足させた。史上最年少でプロツアーを制した石川遼選手も初代メンバーに名を連ねるチームジュニアとはどのようなものか。またそこに寄せられる期待は？ チームジュニアの仕掛け人でもあるジュニア強化部長の小室秀夫氏に伺った。



(財)日本ゴルフ協会
ジュニア強化部会 部会長 小室秀夫

— ジュニア界はもとより、日本ゴルフ界にとってのビッグニュースが飛び込みましたね。

小室 高校一年の石川遼君、初めて出場したプロツアートーナメント(マンシングウェアオープン=5月17-20日)で見事優勝。いや驚きました。まだ15歳ですからね。今回の快挙がジュニア界の大きな刺激になればと思っています。

— 優勝決定直後からのフィーバー振りを思えば、その影響力は計り知れないでしょう。

小室 現役のジュニアゴルファーだけでなく、プロやナショナルチームメンバーも含めた全競技ゴルファーの目の色が変わりそうだ。これを期にゴルファーを目指す子供たちの増加も期待できます。ただ、だからこそ今が肝心だと思う。あまりの環境の激変に、石川君自身が自分を見失わなければいい。全国区の人気者となりましたが、まだ高校1年生であり、本分は勉強ですからね。

— 優勝直後の石川選手の談話に「これから中間テストが始まるので、勉強もがんばります」とあり、すがすがしい気持ちになりました。今のままの気持ちと環境が保たれば、「15歳の快挙」に押しつぶされやしないと感じました。

小室 JGAとしても、そこだけは特に気を付けています。できるだけ“外野”からの刺激から守ってあげたい。

— その石川選手も今年度から新設された“チームジュニア”のメンバーでしたね。

小室 JGAは毎年ナショナルチーム(チームジャパン=日本代表)を組織して、さまざまな海外競技に選手を派遣していますが、今後さらなるチーム強化を目指し、その前段階としてチームジュニアを組織しました。

— チームジュニアを組織するに至った背景には、どのような経緯があったのですか？

小室 これまで日本代表は、ノムラカップや世界アマを制するなど数多くの国際舞台で活躍してきました。アジア圏での大会のみならず、世界的なゴルフ強豪国としての地位を築き上げた自負も



ラウンド合宿の様子



ある。ところが近年、アジア各国のゴルフ振興が進むとともに、欧米諸国のゴルフ先進国がこぞってナショナルチーム強化に取り組んできました。そのため国際舞台での日本代表の苦戦が続いているのです。日本の最高権威の大会である日本アマですら、男子は04年から3年連続で外国選手に勝利をさらわれている。アジア競技大会では、ゴルフが初めて実施された82年大会(ニューデリー)以来続いていたメダル獲得記録が途切れる事態となりました。

— ゴルフとは縁遠かった国々でのゴルフがレベルアップし、その結果日本が飲み込まれつつある。今一度ゴルフ強豪国としての地位確立を目指すために、ジュニア世代から強化に取り組むということですね。

小室 そうですね。それともう一つ、ゴルファーの若年化が挙げられます。現在米プロツアーで活躍する宮里藍選手はじめ、多くのナショナルチームの卒業生がプロツアーで活躍していますが、アマチュアゴルファーのプロ志向がとて強くなっている。高校を卒業と同時にプロ転向というゴルファーも少なくありません。つまりナショナルチーム全体の年齢低下と、アマチュアとしての活躍期間の短さが顕著となってきたのです。これらの現状を踏まえた上で、若年層のゴルファーからナショナルチームメンバー入りを目標とする選手を組織し、強化するためにチームジュニアを発足させました。

— 世界各国の競技レベルが上昇した理由はどのあたりにあるのでしょうか？

小室 個々の力もありますが、本格的なナショナルチームの強化が目立ちます。昨年の世界アマを制したオランダは、01年から世界アマ優勝を目標に3名の専属コーチを招聘していますし、世界女子



バランスディスクを使ったフィットネス

アマでは、ホスト国の南アフリカが開催コースで十分な練習を積んで、念願の初制覇を成し遂げました。スウェーデンの国家的な英才教育も、すでに大きな成果を挙げているし、韓国も本当に強豪国となりました。

— まさに世界的なゴルフ振興の結果とも言えそうですね。

小室 今後はいっそう、こうした傾向がますます強まっていくでしょう。

— 具体的にどのような部分が遅れをとってしまったとお考えですか？

小室 男女とも、日本チームメンバーのショット力は国際レベルにあると思います。ところがそのショットが最後まで続かない。考えられる点は、新興強豪国も含め、世界的に活躍するゴルファーと比べて体力面での差が出ているようです。技術的に劣ることはなくても、環境が激変し、しかもタフなラウンドが続く国際舞台では、最後に体力が勝負を決める。また「国を代表して出場している」という責任感も、大きな勝負の分岐点ではないでしょうか。

かつては日本にも生涯アマチュアゴルファーを貫く者が多く、日本代表という意識をとて強く抱いていました。ところが現在では、多くの選手が近い将来プロゴルファーとして活躍することを目標としています。国際競技での経験は、自らの将来に向けては必ずプラスになりますが、その舞台の大きさ、日本代表としての誇りについては、かつての選手よりも自覚が少ないように思えてならないのです。

— ということは、チームジュニアでは、ジュニア段階から激戦を勝ち抜ける体力や、ナショナルチームとしての誇りを植えつけていくということになりますね。

小室 飛距離を伸ばす、ショット精度を向上させるといった直接的なレベルアップに比べて時間はかかると思いますが、この二要素は国際舞台で強豪国と伍して競うためには、絶対に不可欠だと思います。



合宿恒例の夜のミーティング



—— チームジュニアの対象は中学生から高校1年生くらいになると思いますが、やはりその年頃からしっかりと英才教育を施す必要があるのでしょうか。

小室 英才教育という言葉には誤解があると思います。子供にとって、その年代ごとに経験しなければいけないことが必ずあります。学校生活や家庭での日常生活の中で、いろんな経験をつみ、社会人としての素養を養う。それは将来ゴルフで生計を立てたいと考えたときにも、大きく役立つことに間違いありません。思春期は多感な時期です。ゴルフに限らずさまざまなスポーツに親しみ、楽しさや苦しさを味わったうえで、生涯スポーツとして、ゴルフを選んで欲しいですね。ですからこのプロジェクトは、ゴルフの英才教育を行うというよりも、将来トップアスリートとして活躍するために必要なカリキュラムを提供していく予定です。

—— 昨今のジュニアゴルファーを取り巻く環境とかつてのジュニアゴルファー界とでは、大きく様変わりしたのでしょうか。

小室 大きく変わりましたね。80年代までは、ゴルフ場もジュニアへの開放に消極的で、ジュニアはプレー機会も限られていましたが、現在では多くのゴルフ場が積極的にジュニア育成に協力的です。沖縄県では夕刻になるとジュニアに安価でコースを

提供したり、無料開放している練習場も少なくない。またゴルフを始めるタイミングも低年齢化が進んでいるようです。家庭で手軽に欧米のPGAツアーが見られるようになり、女子ゴルフ界では若い世代が大活躍しています。今や幼稚園児や小学校低学年でさえ、堂々と「将来の夢はプロゴルファー」と言い切る子供が増えているようです。

—— ならばなおさら、多くのジュニアを正しく育成していくためにも、頂点に全国組織のチームジュニアは不可欠な存在となってきますね。一方で、野球やサッカーなど、それぞれの種目で独自にジュニアを育てていますが、ゴルフの場合の「育成スタイル」は？

小室 ゴルフは個人競技です。また「フェアプレー」「マナー」の尊重というゴルフの精神があります。美しいスイングを覚えること、よいスコアでプレーすることと同等か、それ以上にこの「ゴルフの精神」を養わなければいけません。また国際競技においては、日本国内では考えられない環境が待ち構えます。それに動じないメンタリティも必要でしょう。つまりゴルフにおいては、「心の教育」が必要不可欠なのです。加えて基礎体力面において、世界との差を縮め、最終ラウンドの最後のショットまで、普段と変わらないショットが放てる体力を身に付けることに重点を置いています。

—— 石川選手の場合は、一足飛びに全国区のヒーローとなりましたが、それでも心の教育と基礎体力作りの継続は大切ですね。

小室 石川君の結果は傑出したものとなりましたが、チームジュニアメンバーそれぞれが、浮き足立つことなく、今なすべきことをしっかりと見つめなくてはならないでしょう。実はそのメンバー個別に担任制で委員をつけました。最低1週間に1度はジュニア本人とその保護者と連絡を取り合い、練習状況の把握や悩み事などの相談も受けて

います。

—— 一般的に子供たちへの指導を委ねられる保護者やコーチの方々への注文はありますか？

小室 まず、必要以上にスコアにとらわれないことですね。その日の調子によっては、思いもよらぬスコアでプレーを終えることもあるでしょう。しかし最後まで投げやりにならず、その日1日を精一杯プレーしたかどうかを評価して欲しい。またゴルフの精神を正しく理解し実践することです。ゴルフは人間形成に大きな役割を果たすと考えますので、保護者やコーチには、特に重点を置いて指導していただきたい。加えて食事を含めた日常生活を規則正しくおくこと。各ご家庭で子供たちを律していただきたいと思います。

—— チームジュニアとしての目標、またはメンバーに期待することは？



バランスボールを使った下半身の強化トレーニング

小室 来年、再来年のナショナルチーム入りを果たし、日本代表として国際競技に出場する姿を見せて欲しいですね。そして近い将来、ナショナルチームが再び世界アマ優勝を成し遂げたときに、そのメンバーがチームジュニアの卒業生であることが、当面の目標ですね。また個々のメンバーには、チームジュニアで作成した体力強化のカリキュラムに、自覚を持って取り組むことを期待しています。

—— チームジュニアは、多くのジュニアゴルファーの頂点に位置付けられるわけですが、ゴルフ普及の面から、チームジュニアの役割をどうお考えですか？

小室 日本代表に必要な素養は、なにもゴルフ



技術に優れていることだけではありません。チームジュニアは、日常生活からチームジュニアとしての自覚を促し、節度ある態度が取れるように指導しています。もちろん学生の本分である学業をおろそかにしないよう、注意を払っています。こうした姿勢のチームですから、発足したてではありますが、同年代ゴルファーの目標となるように活動していきたいですね。

チームジュニアの存在により、「エチケット」「マナー」



合宿で行われたラウンド風景

に代表されるゴルフの精神が広く普及させること、そしてナショナルチームの強化につながっていくことを、期待しています。

—— 年末には第一回の小学生大会も実施予定ですが、チームジュニアの発足、石川選手の快挙と、ジュニアゴルフ界は、ますます活況を呈していきそうですね。

小室 ジュニア世代のスポーツマンに注目の集まる時代のようなです。ゴルファーの底辺拡大と、アスリートゴルファーとしての人材発掘、そしてなによりゴルフの楽しさと素晴らしさを、正しく広める契機としたいですね。